

マヤグエース号事件と米国の 対外政策—ヴェトナム戦争後の幕間劇

黒 川 修 司

本論文は1975年5月12日に発生したクメール・ルージュ (Khmer Rouge) によるマヤグエース号 (SS Mayaguez) の捕獲に対する、米国フォード (Gerald Rudolph Ford, Jr.) 政権の過敏な軍事的反応の政策決定過程を説明することを目的とする。米国籍の貨物船が拿捕されただけであり、しかも船は無傷で取り返せし、じきに40人の乗組員も解放された。僅か3日間の出来事であり、客観的に見れば事件自体は、海外での軍事行動を必要とするような米国の安全保障に対する脅威ではなかった。しかし、南ヴェトナムの首都サイゴンが陥落 (4月30日) してから2週間後の時期に発生した、民間船の拿捕事件に対して、フォード政権は早急な軍事行動を取った。その主な理由はフォード大統領が、ヴェトナム戦争後の最初の米国パワーに対する直接的な挑戦であるこの拿捕事件を認識したことと、より正確には選挙で選出されていない正統性に欠ける大統領である自分に対する最初の試練だと考え行動したためであり、政府全体も北朝鮮に捕獲されたプエブロ号事件の記憶と反省に囚われていたからである。

また、米国民は巨額の軍事経済援助と5万人以上の米国の若者が命をささげた南ヴェトナム政府があっけなく崩壊する有様をTVでみていた。特に米国に協力してきたサイゴンの人々が、撤退する米軍のヘリコプターにしがみついているのに、米人がその手を踏みつけてドアからたたき出している情景をみて、深く傷つけられた。傷ついた大国のプライド復活をもたらしたフォード政権の果敢な軍事行動に国民も喝采したのであった。

1974年8月9日にニクソン大統領がウォーターゲイト事件により辞職し、

副大統領フォードが選挙の洗礼を受けないまま第 38 代大統領に就任していた¹。米国は弱体化したとのイメージを払拭するためにも、フォード政権は弱腰の外交は出来なかったと思われる。それどころかマヤグエース号と乗組員を無事に取り返すことが大統領のイメージを強め、米国の政治的・軍事的信頼性を回復する好機だと捉えたかもしれないのである。

カンボジアによって米国船籍のコンテナ貨物船が、タイとカンボジア国境のタン島 (Koh Tang)² 沖合いで捕獲された。ワシントンは交渉よりも軍事行動を優先し、カンボジア海軍とカンボジア本土に対する空爆を実施した。更に、マヤグエース号を取戻した後で、乗組員が捕らえられていると想定されたタン島に海兵隊を送り込み、クメール・ルージュと交戦した。海兵隊は予想外の損害を被り、海兵隊の伝統に反して行方不明者 3 名を放置したまま撤退した。無人のマヤグエース号が確保され、解放された乗組員が乗船し操縦して帰国の途に着き、事件は解決した。フォード政権は勝利を祝い、戦争権限法は憲法違反だと主張しながらも、規定に「留意」して 48 時間以内に議会に報告書を提出した。

1. 事件の発生³

香港からタイのサターヒップ (Sattahip) に向けて 274 個⁴ のコンテナを

¹ 大統領選挙時のニクソン大統領の副大統領はアグニュー (Spiro Agnew) であったが、州知事時代の収賄の罪が確定したことで辞職した。そのため有力な下院議員 (共和党下院内総務) であったフォードが副大統領に指名された。ニクソンの辞任を受けて大統領となったフォードが、自分の庶民性をアピールしたジョークが乗用車に引っ掛けた "I am Ford not Lincoln" であった。

² クメール語では koh は島を意味するので、コー・タンあるいはタン島が適切であり、しばしば英語文献に見られるコー・タン島の表記は正しくない。

³ この事件に関する日本語文献は殆どない。宇佐美滋「危機管理と政策決定—マヤグエース号事件におけるフォード政権の危機処理について」『国際問題』1980 年 7 月号、43-67 頁、が先駆的な業績だが不正確な記述が目立つ。NSC 資料が機密解除されていない時期の論文なので、議会資料に全面的に依存している。

⁴ Lamb によれば、77 個のコンテナはタイのサターヒップ向け、96 個はシンガポール向け、残りの 101 個は空であったという。(Lamb, p. 152) 中身は軍事郵便と PX で販売する衣類、塗料、医療用品、食料などであり、カンボジア側が疑った軍需品はなかったという。

運搬していた船齢 31 歳の古ぼけた貨物船（1 万 0776 トン）がカンボジアの 60 マイル沖合に位置するポウロ・ワイ（Poulo Wai）島の南東 7 海里を 12.5 ノットで走っていた。このマヤグエース号は Sea-Land Services 社所有であり、米国政府の依頼を受けて駐タイ大使館や米軍向けの食料や日用品を運んでいたもので、兵器などは運んでいなかった。5 月 12 日の午後に漁船らしきものを発見したが、それはクメール・ルージュのパトロール・ボートであり、ロケット砲撃し、機関銃を撃って停船を命じた。実はこのボートはヴェトナムの川でパトロールするための米国製の PCF（Patrol Craft Fast）であり、約 1 ヶ月前にカンボジアのロン・ノル（Lon Nol）政権が崩壊した時にクメール・ルージュの手に落ちたものであった。攻撃を受けた時に、船は北緯 9 度 48 分、東経 102 度 53 分の位置にあった。船長 Charles T. Miller（62 歳）は直ちにモールス信号 SOS を打電させ、高周波数の音声ラジオでも放送させた。近くを航行していたノルウェー船と英国船で受信されたこの SOS は、インドネシアの首都ジャカルタで Delta Exploration Company が受信して、すぐに米国大使館に伝え、ワシントンへ転送された。民間船なので抵抗は出来ず、接触し移乗してきた 7 名のクメール・ルージュ兵士の指示に従い、（現地時間 14 時 18 分）ポウロ・ワイ島沖に碇を下ろした。翌朝、タン島の北東 1 マイルの地点に投錨した。

この当時、カンボジアは混乱しており、4 月 1 日にロン・ノル大統領が亡命し、政権が崩壊した。ヴェトナムが支援していた共産党（Communist Peoples Party: CPP）と FUNCINPEC（The National United Front for an Independent, Peaceful, and Cooperative Cambodia）の連合政権であるクメール・ルージュが 4 月 17 日に首都プノン・ペンに入ってきた。南ヴェトナム政権は崩壊し、4 月 30 日にサイゴンが陥落し、共産勢力が全土を掌握した。ところが、カンボジアとヴェトナムは米国が残した大量の武器と装備を確保すると同時に、国境と所属があいまいな島々を占拠し始め、対立を深めていた。クメール・ルージュはヴェトナムより 2 週間早く手を打ち、カンボジア

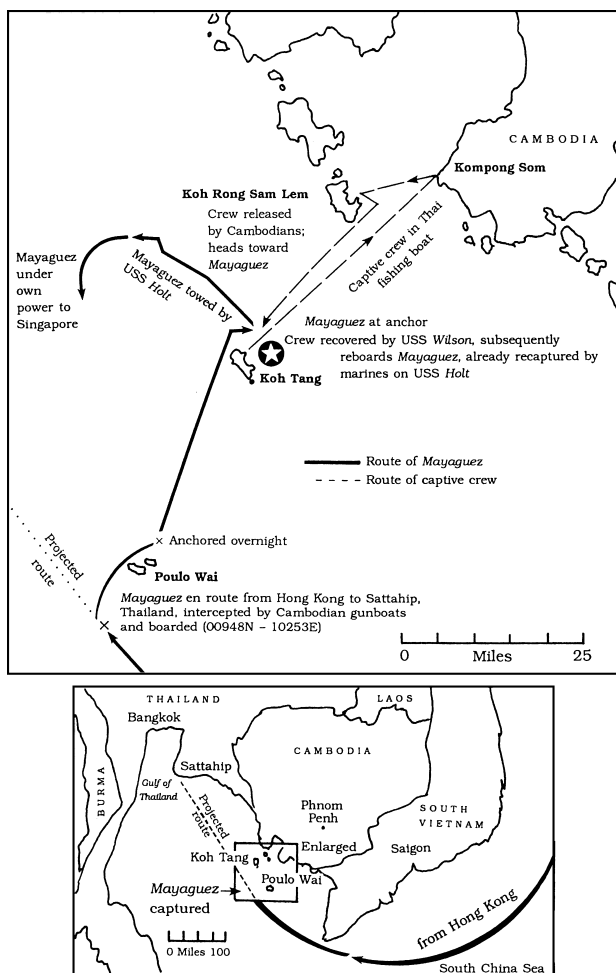


図-1 マヤグエース号の捕獲

(出典: General Accounting Office, *The Seizure of the Mayaguez: A Case Study of Crisis Management*, 1976, p. 64)

が主張する領土に軍隊を派遣していた。5月4日には Phu Quoc 島の近くで両国の軍艦が砲火を交えた。この島はフランスの植民地当時から南ヴェトナムの一部として統治されていたが、主権問題は解決していなかった。5月

10日にはワイ島に駐屯していたカンボジア軍が、ヴェトナムが支配していた小さな島を占領した。カンボジア政府は領海を90海里（約167km）だと宣言し、その結果、5月2日にはタイのトロール船7隻を拿捕し、5月4日には韓国船に銃撃を加えて、5月7日にはパナマ船を35時間に亘って捕獲していた。

そのような状況下でマヤグエース号は捕獲された。報告された位置が正しければ、拿捕されたのはカンボジアが主張する領海内であった。仮にその位置がカンボジア領海内であっても、国際法では無害通航（innocent passage）が認められていた。

2. フォード政権の政策決定

拿捕から約2時間後の5月12日午後4時12分（ワシントン時間午前5時12分）、国防総省の作戦室（NMCC: National Military Command Center）に事件の第一報が届いた。ジョーンズ（David C. Jones）統合参謀本部議長代理が連絡を受けたのが午前6時46分、ハワイの太平洋統合軍司令部（CINCPAC）が偵察機の発進準備を命じたのが、午前7時30分であった。1時間半以内にタイとフィリピンからP-3オライオン対潜哨戒機が飛び立った。

ホワイトハウスではスコークロフト（Brent Scowcroft）国家安全保障担当次席補佐官が連絡を受けたのが午前7時、フォード大統領にニュースが届いたのは、定例の朝の諜報ブリーフィングの席で午前7時40分であった。軍部から政府首脳への連絡が遅れた理由としては、捕獲されたのが米国海軍の船ではなく、民間船であったので急がなかったのかもしれないが、詳細は不明である。

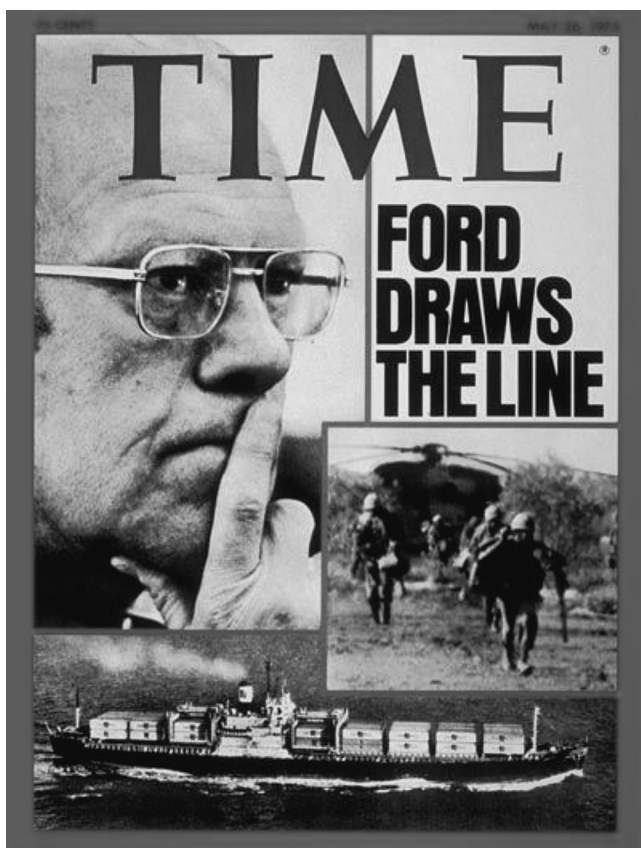
キッシンジャー（Henry A. Kissinger）国務長官（国家安全保障担当大統領補佐官を兼ねていた）に緊急事態が伝えられたのは、午前8時であった。彼はこの事件に非常な関心を示し、9時23分に大統領執務室で、フォード大統領、スコークロフト次席補佐官（空軍中將）と協議し、正午に国家安全保

障会議⁵ (NSC: National Security Council) が招集され、フォード大統領が出席した。このような問題は通常は、まずもっと低いレベルの組織である WSAG (Washington Special Action Group) で討議されるのだが、明らかに自らこの問題を処理したいとの大統領の意思がここに反映されていた。出席者は以下の 11 名であった。フォード大統領、ロックフェラー (Nelson A. Rockefeller) 副大統領、キッシンジャー国務長官、シュレジンジャー (James Schlesinger) 国防長官、コルビー (William Colby) CIA 長官、インガソル (Robert Ingersoll) 国務次官、クレメンツ (William Clements) 国防次官、ジョーンズ統合参謀本部議長代理 (ブラウン議長が NATO との協議のため欧州に出張中)、ラムズフェルド (Donald Rumsfeld) 大統領補佐官、スコークロフト国家安全保障担当次席補佐官 (NSC 担当)、スマイザー (W. R. Smyser) NSC 上級スタッフ (東アジア担当)。

まず、コルビー CIA 長官がマヤグエース号はタイ湾のポウロ・ワイ (Poulo Wai) 島沖合い 7-8 マイルの地点で拿捕され、60 マイル離れているカンボジア本土の Kompong Som (旧シアヌークヴィル) 港へ連行中だと説明した。(実際にはそうではなかった) この島はカンボジアとベトナムの双方が領土だと主張しており、カンボジア側が占領していると説明した。領土紛争の背景にはタイ湾における潜在的な石油資源があると思われた。しかしながら、カンボジア側の意図は不明だと発言した。

キッシンジャー国務長官は「大統領、われわれは 2 つの問題があります。最初の問題はいかにして船を取り戻すかです。2 つ目は米国がどのように見られる

⁵ NSC は国家安全保障に関する議論をする場であり、大統領に選択肢を提供する役割を担うものであって、政策決定をする機関ではない。ニクソン政権ではキッシンジャー国家安全保障担当大統領補佐官が主宰する WSAG (ワシントン特別行動グループ) が国務省、国防総省の次官レベルで構成され、危機のような問題はここで議論していた。キューバ・ミサイル危機においてケネディ大統領が NSC の特別会議である ExCom を利用したことは有名である。John P. Burke, *Honest Broker?: The National Security Advisor and the Presidential Decision Making*, Texas A & M University Press, 2009, あるいは Carnes Lord, "Rethinking the NSC Role" *Comparative Strategy*, Vol. 6, No. 3, 1987, pp. 241-279. などを参照。



事件を報ずる Times 誌の表紙（1975 年 5 月 26 日号）

かです」とこの危機をどのようにみるべきかを示した。（国家安全保障会議、5月12日12時05分-12時50分、当時は「極秘」（Top Secret）であったが、1996年に機密解除された文書である。しかし依然として解除されていない部分を含む。以下 NSC 議事録#1 と省略することにする。NSC 議事録#1、p. 4）そう前置きしてから、キッシンジャーはヴェトナム撤退で傷ついた米国の威信を回復するためにも、強硬手段も辞さないであるべきだと発言し、フォード大統領もこれを支持したために、現場の詳しい状況も分からないままに、最初から軍事

力の行使という選択肢が議論されることとなった。キッシンジャーは報復として公海上のカンボジア船籍の船を拿捕しようと発言したが、国交のない東南アジアの小国に関するそのような情報をどの高官も持っていなかった。彼は今後48時間に必要なものは、強い声明と（カンボジアに対する）強気の覚え書き（note）、そして軍事力の威嚇（a show of force）だとした。（NSC 議事録#1, p. 5）キッシンジャーは空母艦載機あるいはグアム島に配備されていた B-52 爆撃機から機雷を投下して、本土のコンポン・サム港を封鎖することまで提案した。

ロックフェラー副大統領⁶が「これはテストケースだとみるべきである。韓国がどうみるか問題である。（I think it will be judged in South Korea.）プエブロ号事件を思い出す。すぐに強い行動を取るべきである。（I think a violent response is in order.）…世界に米国が行動できること、即座に行動できることを知らせるべきである。攻撃目標があるかどうか知らないが、即座に行動すべきである。…抗議する前に行動すべきだ。（カンボジア）は軍事力しか理解できないのだ」（NSC 議事録#1, p. 8）とタカ派の意見を述べた。

この当時朝鮮半島は緊張を強めていた。4月には北朝鮮がNMZ（非武装地帯）に複数のトンネルを掘っていたのが発見されていた。朝鮮半島での米国が対応した過去の事件をみると、1968年1月には米海軍のスパイ船プエブロ号が拿捕され、1969年4月にはEC-121偵察機が撃墜される事件が発生していた。カンボジアでの対応を誤ると、北朝鮮に誤ったシグナルを送ることになるとの朝鮮半島との関連性を、政策決定者グループはこの危機で常に意識することになる。

確かにフォード大統領は1968年に発生したプエブロ号事件⁷の二の舞は避

⁶ Lambはロックフェラー副大統領はNSCのみに参加しているだけであり、それでもキッシンジャーの意見を繰り返しているだけだとして、重要な政策決定メンバーではないとしているが、（Lamb, p. 55）NSC 議事録から見るとそうは思えないのである。本論文が依拠しているNSC 議事録が機密解除されたのは1996年である。

⁷ 拙稿「プエブロ号事件—米国の情報活動と危機」『論集』（東京女子大学紀要）第57巻第1号、2006年9月、1-25頁。

けたいと考えたと思われる。この北朝鮮に拿捕されたスパイ船は北朝鮮本土の元山に連行されたために、米国は軍事行動を実施しての奪還も出来ず、その後約一年間に亘り捕虜の釈放交渉に苦勞したのであった。最終的に乗組員を解放できたが、船は取り戻せなかった。シュレジンジャー国防長官は、「彼らは既に船を拿捕している。プエブロ号事件と同じだ。元山港に連れて行かれてから取り戻すのは困難だった」(NSC 議事録 # 1, p. 9) と発言して、早めに軍事行動を取る必要性を強調した。

シュレジンジャー国防長官が示した選択肢は、1) カンボジア資産の凍結、2) 軍事力を集結させる、3) 人質として利用するために小島を占領する、4) 海上封鎖、であった。(NSC 議事録 # 1, pp. 3-4) 同長官は実際に何が起っているのか不明であるとし、カンボジア側の官僚の誤った判断による拿捕かもしれないし、対ヴェトナム政策の副産物かもしれないと、現時点からみるとかなり正しい判断をしていた。更に、カンボジアは既に、パナマ、フィリピンの船を拿捕しているが、直に解放していることも述べていた。

キッシンジャー國務長官はまるで自分が国防長官であるかのような強硬な発言をしていた。「港を機雷で封鎖するよりも島を占領する方が有利だと思う。島にいるカンボジア軍の兵力、どの程度の戦闘になるかなど関連する要素をみてみましょう。」(NSC 議事録 # 1, p. 12) そして、以下の3つのことを知る必要があると述べた、1) 島を占領するに必要な兵力、2) Kompong Som を占領し、マヤグエース号と乗組員を取り返すに必要な兵力、3) 港を機雷で封鎖するに必要な兵力。彼自身は第2案を好むとしていた。

フォード大統領は「これは明らかな海賊行為だ」(a clear act of piracy) (NSC 議事録 # 1, p. 11) と発言して、強い声明を出すことに賛成し、空母コーラル・シーを急派するよう命令した。偵察行動が行われるウ・タパオ(U Tapao) 基地があるタイ政府には基地を使用する許可を求めないことにした。更に、具体的な軍事行動が決まるまで、議会とは連絡を取らないことも決められた。会議終了後、フォード政権はマヤグエース号の拿捕は「海賊行為」だとする非難声明を出した。

米国は外交交渉で事件の解決を図りたくとも、カンボジア政府と外交関係を持っていなかった。仕方なく、在ワシントン連絡事務所の中国代表陳礦（？）（Huang Chen）を国務省に呼び出して、インガソル国務次官が拿捕を抗議する文書をカンボジアに渡すように依頼したが、中国側はこれに応じなかった。そこで北京駐在の「米中連絡事務所」のブッシュ（George Herbert Walker Bush）公使（後の第 41 代大統領）が在北京カンボジア大使館と中国政府に、乗組員の釈放を求める文書を渡した。しかし、中国政府は翌日カンボジア側に渡すことなく返却し、カンボジアは翌日郵便で返送してきた。ワルトハイム（Kurt Waldheim）国連事務総長を通しての交渉も図られたが効果はなかった。

カンボジア政府はマヤグエース号は領海を侵犯した CIA のスパイ船だと発表した。

2 度目の国家安全保障会議は 5 月 13 日午前 10 時 22 分から 11 時 17 分にかけて開かれた。まず、コルビー CIA 長官から報告がなされ、マヤグエース号は偵察機（P-3 が 3 機飛んでいた）によるとタン島の沖合いに停船している。最新の偵察機からの報告では、乗組員はタン島へ移送され、島の内部に連行された。また、クメール・ルージュ政権はこの事件に関して公式声明を出していないし、北京のシアヌーク（Norodom Sihanouk）殿下もこの件に関しては何も知らないと発言している。（NSC 議事録 #2、p. 2）キッシンジャー国務長官とインガソル国防次官はカンザス・シティでの先約があり、この 2 回目の NSC 会議に欠席していた。

後からみるとこの乗組員がタン島へ移されたとの情報が決定的な重さを持ったと言える。この前提にしたがって島への攻撃が立案され、情報と兵力不足から海兵隊が苦戦することになったのである。

シュレジンジャー国防長官が選択肢をもう一度並べた。1) コンボン・サム港を占領するには大規模な兵力が必要になる。この地域の共産党勢力は約 1700 名と推定される。2) 今日最初にすべきことはマヤグエース号をこの港から出すことである。3) 船を取り戻すためには海兵隊とウ・タパオ基地に

いるヘリコプター部隊を使用するが、駆逐艦 Holt が到着するまで（12 時間後と推定）行動は取らない。Holt が到着すれば兵員も増えるので、軍事的に優勢になる。但し、一日待つとカンボジア側に対処する時間を与えてしまうので、明日の日の出と同時に行動することが望ましい。（NSC 議事録 #2、p. 8）大統領の質問に答え、島を占領するために使用する海兵隊は沖縄にいたため、C-140 輸送機で 1600 マイルの距離を運ばねばならないので、12 時間かかると説明した。タイのウ・タパオ基地には海兵隊が 125 名いた。（NSC 議事録 #2、p. 9）

シュレジンジャー国防長官はタン島にはカンボジア兵が約 60 名いると思われると報告したが、これはいかにも過小評価であった。（実際にはかなりの武装をした 150-200 名のクメール・ルージュがいたと思われる）また、彼は 3 つの目的を述べた。1) マヤグエース号を本土の港へ連行させないこと、2) 乗組員を取り戻すこと、3) 船と乗組員を取戻した後で、最大の罰を与えるためにカンボジア海軍を攻撃するとしながらも、カンボジア側の意図が不明だと発言していた。（NSC 議事録 #2、pp. 11-12）更に、タイ側の反応を質問されると、「われわれの行動を見れば、タイも態度を変えるでしょう。公式には抗議してくるでしょうが、非公式には賛成します。今まででもそうしてきました」とタイ政府を軽視する発言をしている。（NSC 議事録 #2、p. 4）ククリット（Khukrit Pramo）タイ首相は 5 月 14 日の記者会見において、カンボジアに対する攻撃のためにタイ国内にある基地を米国が使用することを、タイ政府は拒否すると米国の駐タイ代理大使に伝えたことを公表していた。

米軍機の攻撃でカンボジアのボートが 1 隻沈没したため、5 月 13 日の夜 10 時 22 分から翌日の午前 12 時 25 分まで第 3 回目の国家安全保障会議が開かれ、キッシンジャー国務長官も参加して、情勢分析が行われた。スコークロフト大統領次席補佐官から、空軍機が暴徒鎮圧用の催涙ガスを 2 度散布したが、ボートを停船させることが出来ず、コンボン・サムから約 6 マイルまで接近していることが伝えられた。

ジョーンズ統合参謀本部議長代理は、駆逐艦ホルトがワシントン時間の明

日 12 時 30 分に現場に到着予定であるが、空母コーラル・シーとハンコックは更に遅れると報告した。スービック湾にいる空母ハンコックは一本のプロペラ・シャフトが故障している。海兵隊は沖縄からタイのウ・タパオ基地に空輸中であり、ヘリコプター部隊は既に警戒段階にある。明朝には 1000 名の海兵隊員が到着すると報告した。(NSC 議事録 #3, p. 6) シュレジンジャー国防長官からは、ウ・タパオ基地には 11 機のヘリコプターが利用でき、対艦攻撃が可能であること、タン島を攻撃する海兵隊は 120 名で、沖縄からの支援部隊を加えると 270 名になる。また海兵隊はタン島にカンボジア兵が約 100 名いると推定していると報告した。(NSC 議事録 #3, p. 7)

米国からすれば各地から集めた兵力がある程度まとまるために、行動を起こすまでに一日待つべきであった。しかし、現地の情報が殆ど入ってこない状態では、船と乗組員がどこにいるか皆目分からずワシントンは焦燥感にあふれていた。一日待てば船と乗組員を取り返せる可能性が低くなると判断し、空軍機によるボート攻撃を実行し、海兵隊をヘリコプターでタン島に上陸させること、B-52 あるいは空母コーラル・シーの艦載機でカンボジア本土のコンポン・サム港と近辺の空軍基地を爆撃することを決定した。

キッシンジャー国務長官は、「船を解放させるだけでは十分ではない。空母 1 隻、駆逐艦 1 隻、1000 名の海兵隊員を使って、船を取戻すだけでは駄目です。カンボジア本土を爆撃すべきです。カンボジアを考えるのではなく、韓国とソ連を考えるべきです。このような状況で行動することに関して、彼らが間違った印象をもったら議会との交渉も上手くいかない」と相変わらずのタカ派ぶりの発言をしていた。(NSC 議事録 #3, p. 11)

議会対策も検討された。シュレジンジャー国防長官は、戦争権限法 (War Powers Resolution, PL. 93-148) によって行動が禁止されているのではなく、クーパー・チャーチ修正法⁸ がインドシナにおける軍事行動を禁止している

⁸ これは正確な表現ではない。1973 年 6 月 19 日に成立した Case-Church 修正法が、議会からの権限付与なしの東南アジアにおける米国の軍事行動を禁止した。

と、発言した。(NSC 議事録 #3、p. 16) しかし、フォード大統領は国際法に関しては何の問題もないと判断していた。大統領の命令でホワイトハウスのスタッフが 10 名の下院議員と 11 名の上院議員に接触し、大統領が命じた軍事手段を説明した。(Head et al. p. 115) クレメンツ国防次官が「われわれの目的を見失っては拙い。米国人と船を取戻すことが目的です。カンボジア人を罰することは全く別の問題です。カンボジア本土を爆撃しても米国人を解放することには役立たない」と慎重な意見を示していた。(NSC 議事録 #3、p. 6)

ハートマン (Robert H. Hartmann) 法律顧問は「この危機はキューバ・ミサイル危機と同様に、大統領のリーダーシップが問われる最初のテストです。大統領閣下、あなたが何を決定するかよりも国民がこの事件をどのようにみることが大切なのです」(NSC 議事録 #3、p. 20) と発言したが、このように、議会、メディア、国民、諸外国がどのように注目するかが、国家安全保障会議の参加者の脳裏から離れることはなかった。

更に、14 日の NSC 会議では、ハートマン顧問が議会に関して報告した。「昨晚、幹部議員たちに行動を伝えました。彼らは支持してくれました。議員たちは、助言はされたが (advised)、協議はなされなかった (consulted) と言っています。下院では戦争権限法に基づく「協議」がなかったと不満が示されました。午後に上下両院の外交委員会のメンバーに限定されたブリーフィングをすることを決めました。議員たちは情報をもっと欲しがっています。問題はどのような伝達と協議をするかです。マンスフィールド、アルバート上院議員と会うべきだとの意見がありますが、そうすると他の議員が怒るでしょう。」(NSC 第 4 回議事録、p. 23) このような政権からの働きかけが効果を生み、上院外交委員会は「大統領が戦争権限法の範囲内で船と乗員を救出するために憲法上の権限を行使した」という見解を発表して、フォード政権の軍事行動を支持した。

11 時 45 分にフォード大統領がキッシンジャー国務長官と以下のような会話を交わしていたことが、秘密のメモから明らかになっている。大統領は

「私の命令が実行されていない。命令を下して実行されないのでは(中略)昨日は腹が立った(I was mad yesterday.)」と発言すると、キッシンジャーは「これはあなたの最初の危機です。強いとの評判を作らねばなりません。これは EC-121 事件の再来です」と大統領を励ましている⁹。

3. 軍事行動

フォード政権にとって困ったことに、カンボジア近辺に米海軍の艦船がいなかった。(図-2 参照) 空母コーラル・シー (Coral Sea: CVA-43) と護衛駆逐艦 3 隻はオーストラリアに向かっていたが¹⁰、現場から 950 マイルも離れていた。この部隊は命令を受け現場に急行したが、到着まで 2-3 日かかると見られた。比較的近くにいたのはフィリピンのスービック海軍基地の南西 100 マイルにいた駆逐艦 USS Harold E. Holt (DE-1074, Knox 級フリゲート艦 4065 t) と補給艦 Vega であった。更に、誘導ミサイル駆逐艦 USS Henry W. Wilson (Charles F. Adams 級 DDG-7) が台湾の高雄 (Kaohsiung) からスービック基地に戻る途中のインドネシア沖にあった。後者は現場まで 770 マイルも有り、直には到着は無理であった。スービック海軍基地には空母ハンコック (Hancock) が海兵隊水陸両用部隊 (MAU: Marine Amphibious Unit) と一緒に停泊していたが、エンジンの不調で直には出航できない有様であった。ハンコックには 14 機のヘリコプターと 400 人の海兵隊を乗せていたので、この部隊がすぐに利用できれば上陸作戦に有用であったと思われる。

⁹ Memorandum of Conversation, President Ford, Dr. Henry A. Kissinger, Secretary of State and Assistant to the President for National Security Affairs, Lt. General Brent Scowcroft., Deputy Assistant to the President for National Security Affairs, Wednesday, May 14, 1975 11 : 45 a. M.?" PLACE: Oval Office The White House, SUBJECT: Mayaguez, File scanned from the National Security Adviser's Memoranda of Conversation Collection at the Gerald R. Ford Presidential Library

¹⁰ 第 2 次世界大戦中 1942 年 5 月 3-8 日にニューギニア沖の珊瑚海海戦における日本海軍に対する勝利を祝う毎年の行事のために公式訪問の予定であった。空母コーラル・シーはこの珊瑚海 (The Coral Sea) から命名されたのである。Guilmartin, op.cit., p. 39.

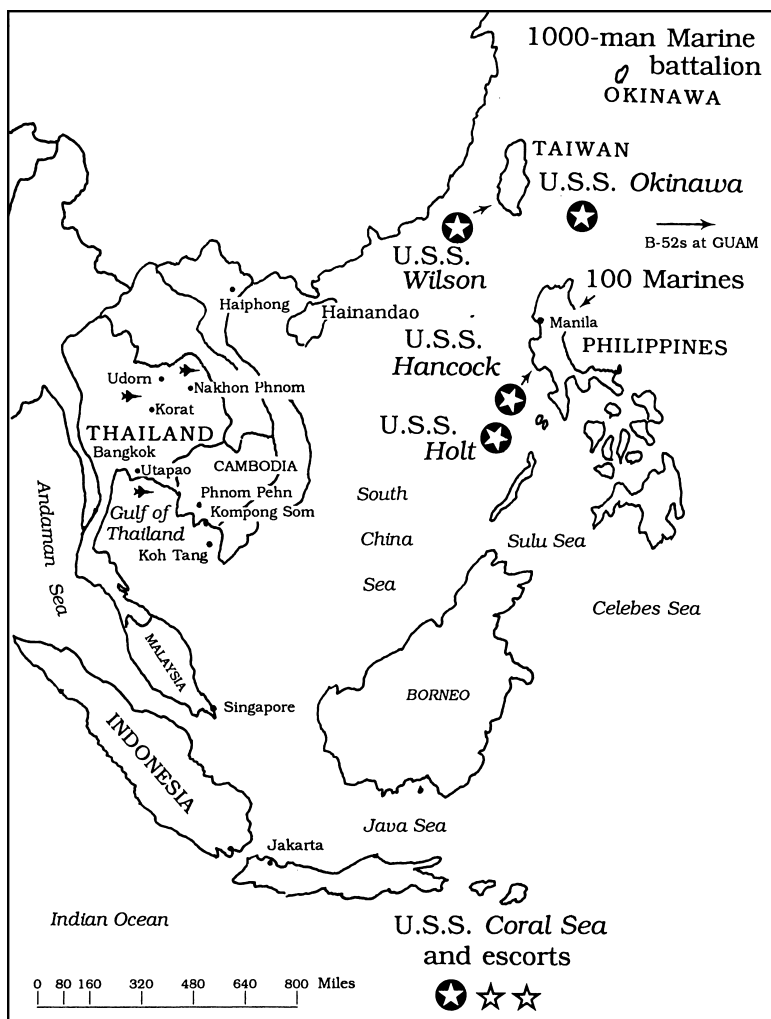


図-2 1975年5月12日現在の米軍配置図

(出典: Lamb, *Belief Systems and Decision Making in the Mayaguez Crisis*, P. 170)

沖縄にいた空中戦闘上陸大隊 (Air Contingency Landing Battalion) とフィリピンのスービック基地から第4海兵連隊の第1大隊がタイのウ・タパオ基地に移動したが、途中のナコン・ファノム (Nakhon Phanom) 基地

でヘリコプターが1機墜落して23名が死亡する事故が起こった。ウ・タパオ基地が現場まで190マイルと一番近いために、集結基地とされた。作戦に参加したのは、タイのナコン・ファノム基地に駐在していた第40空中救助部隊（ARS: Aerospace Rescue and Recovery Squadron）と第21特殊作戦部隊（SOS: Special Operations Squadron）のヘリコプター部隊であった。しかし、利用できるヘリコプターは僅かに11機に過ぎなかった。

このように四軍から部隊がばらばらに引き出されて、統一された司令部なしに政治的目的のために軍事行動が選ばれた。特に問題だったのは、混乱する情報が溢れた中での指揮命令のシステムであった。太平洋軍の最高司令官（CINCPAC）であるゲイラー（Noel Gayler）大將は組織図上では指揮をすることになっていたが、実際の指揮はナコン・ファノム基地にヴェトナム戦争後に移転した第7空軍（COMUSSAG/7AF）のバーンズ（John Burns）中將とウ・タパオ基地に任さざるを得なかった。特に現場から90マイルの地点で旋回していたEC-130に設置されていたABCCC（Airborne Battlefield Command and Control Center）の役割が重要であった。図-3に示されているように、この事件に関する指揮命令系統は複雑であった。更に、空軍と海兵隊とのライバル意識は統合作戦を不可能にした。

14日には空軍機がカンボジアのパトロール・ボートに対して警告射撃を行い、更に暴徒鎮圧用のガスを二度散布していた。カンボジア海軍に対する攻撃の結果、3隻が沈没し、4隻が損害を受けた。しかし、夜陰に乗じて1隻の漁船が本土に向かった。後にこの漁船（Sinvari号）にマヤグエース号の乗組員が乗っていたことが判明した。偵察機からの報告でボートに30-40名程度の人数が乗っているとNSC会議に報告され、ハートマン法律顧問がどうやって偵察機のパイロットは白人（Caucasian）だと判ったのかと疑問を投げかけた。シュレジンジャー国防長官は「体の大きさや皮膚の色など色々なサインから判る」（NSC第2回会議、p. 2）と発言したが、これは疑問である。何故なら、船長と高級メンバーは白人であったが、マヤグエース号の乗組員の大半はフィリピン人、タイ人などのアジア人であった。RF-4

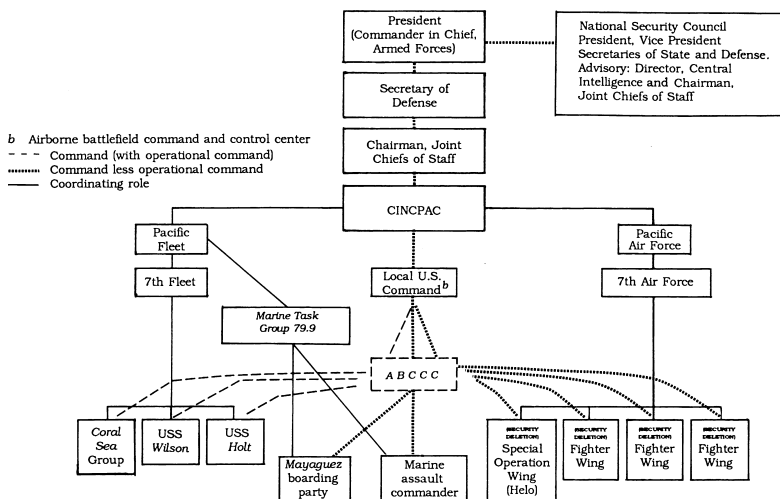


図-3 マヤグエース号事件に関する指揮命令系統
 (出典: General Accounting Office, op.cit., p. 86)

偵察機がいかに出来るだけ低く低速で飛行したと言っても、高度 100 m で時速 450 km で飛行したのでは、ポートの間人をはっきりと見えるはずがない。しかも漁船を撮影しろという命令も受けていなかったのも写真も撮らなかった。確度に問題のある情報で軍事行動が決定される状況であり、失敗に結びついた原因であった。

5 月 15 日の夜明け前 6 時 09 分に 3 機の HH-53 (装甲板と 7.62 ミリ機関銃を装備していた) ヘリコプターと 5 機の CH-53 ヘリコプターに分乗した 175 名の海兵隊員がタン島の北部に接近した。タイのウ・タパオ基地から現場までは 4 時間の飛行であった。この攻撃の僅か 2 分前にプノン・ペン (Phnom Penh) からラジオでマヤグエース号の解放が報じられたが、乗組員については何も言及しなかった。この海兵隊の作戦は現地の状況が不明のまま、マヤグエース号の乗組員が島で捕虜になっていると想定されたので実施された。最初の 20 分間で島の東側から接近したヘリコプターが 3 機撃墜さ

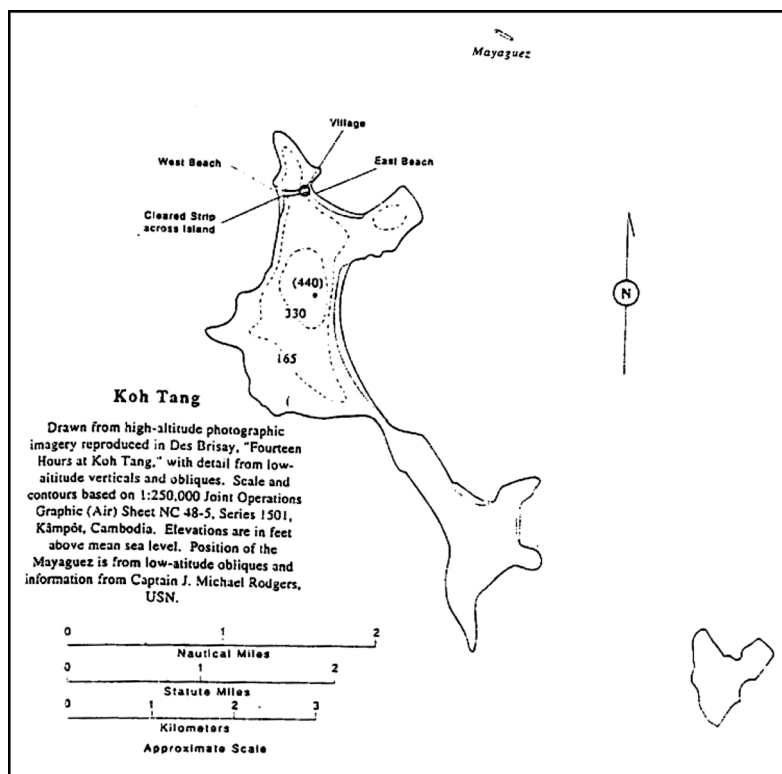


図-4 タン島への上陸（出典：Guilmartin, ibid. p. 71, Map 3）

れ、2機が損害を受けて、14名が死亡した。カンボジア側は82ミリ迫撃砲、75ミリ機関砲、3基の機関銃を備えた150-200名が待ち構えていた。敵に関して混乱していた戦力情報の中では、ペンタゴンの国防情報局（DIA: Defense Intelligence Agency）の情報が一番正しかったのだが、何故かこの大事な情報は現地の司令官には届いていなかった。20-30人の兵力しかないという誤った情報に基づき、175名の海兵隊が送られたのである。海兵隊の攻撃ドクトリンでは少なくとも3対1の優勢を保つことになっていた。誰がこの「計算されたリスク」を判断して「十分な」海兵隊を送った責任を

取るのであろうか。結局 109 名が上陸しただけで、4 つのグループに分断されてしまった。計画では 4 時間後に 10 機のヘリコプターで 250 名が増派されることになっていた。

一方、3 機の HH-53 ヘリコプターがマヤグエース号奪還のために発進した。ところがヘリコプターには海軍と交信できる周波数の機器を積んでいなかったために、駆逐艦ホルトとの連絡が取れず苦勞した。やっと 6 時 31 分にヘリコプターから海兵隊が駆逐艦に乗艦できた。7 時 14 分に A-7 攻撃機が催涙ガスを撒布した。駆逐艦ホルトが 7 時 24 分に 1826 年以來の海軍による乗船攻撃を実施して、マヤグエース号に接舷して、ガスマスクを着けた 48 名の海兵隊が停船中の船に駆け上り、7 時 25 分に無人の船を確保した。急いでエンジンを起動し、8 時 22 分に米国旗を掲げ、碇をカッターで切断して駆逐艦が 9 時 58 分にマヤグエース号を牽引した。その頃、タイの漁船がカンボジア本土から白旗を掲げて接近してきた。P-3 対潜哨戒機から連絡を受けた駆逐艦 Henry B. Willson が接近し、10 時 05 分に乗組員全員を移乗させた。彼らからのヒヤリングによれば、カンボジア側は 14 日の夜に解放する予定であったが、突如変更され解放されなかったという。米空軍の攻撃により硬化したものと推定される。(Wetterhahn, p. 131)

グアム島から B-52 爆撃機を飛ばして、カンボジア本土を爆撃することは、爆弾投下の命中精度が悪いために見送られ、70 マイルまで近づいていた空母コーラル・シーの艦載機によって実行された。空母は 21 機の F-4 ファントム戦闘爆撃機、24 機の A-7 コルセア攻撃機、6 機の A-6 イントルーダー攻撃機、81 発のスマート爆弾（レーザー誘導弾と Walleyes（画像誘導式滑空爆弾））を載せていた。機密解除された文書においても、カンボジアの標的リストは削除されており、どの程度の攻撃が実施されたか分らない。太平洋軍情報部は製油所は数年間使用されていないことを知っていた (Lamb, p. 111) にも関わらず、製油所や港の防波堤まで攻撃目標になっていた。

第一波の攻撃（現地時間 15 日 7 時 45 分）は船の解放を知って、国防総

省が中止命令¹¹を出したために、攻撃目標まであと1分のところで中止命令が届き、目標を逸らして海中に爆弾を投下した。第二波の爆撃（9時5分-15分）はReam空軍基地を狙い、滑走路とハンガーに損害を与え、航空機22機を破壊したと報告された。5000発の20mm機関砲をうち、500ポンドのMark-82爆弾を34発、Mark-20クラスター爆弾を14発投下した。（Mahoney, p. 155）第三波（11時頃）がReam海軍基地とコンボン・サム海軍基地を攻撃し、燃料倉庫、倉庫群、製油所、鉄道施設が爆撃された。Mark-82爆弾を28発、8発のクラスター爆弾、Mark-1「スマート爆弾」も6発使用された。

コルビーCIA長官によれば、13隻の沿岸パトロール艇を含む24隻の軍艦と10隻の川パトロール艇がコンボン・サム近辺にいた。近くのReam海軍基地には3隻のLCU（上陸用舟艇）と1隻のLCM（上陸用舟艇）がいた。港の近くの空軍基地には3機のT-28と6機の輸送機があり、対空砲が備えられていた。コンボン・サムには約2000名のカンボジア兵がいると見られていた。（5月14日（水）15時52分-17時42分、NSC議事録#4、pp. 7-8）第四波の攻撃は大統領の命令に反して、シュレジンジャー国防長官が取り消したようである。世論から不必要な爆撃であったとの批判から救われたにも拘らず、この空爆問題でフォード大統領はかなり立腹した。国防長官に対する大統領の不信感は消えず、11月初めにシュレジンジャーは辞任に追いやられた。後任はラムズフェルドであった。

一方、味方の撃墜されたヘリコプターの乗員を救助したのち、ミサイル駆逐艦ウィルソンは1000mの距離から、タン島に対して5インチ砲を176発

¹¹ この中止命令を誰が出したのか不明である。フォード大統領は第一波の爆弾が無駄になったことに立腹した。「私の記憶では、私が中止の命令を出すまで攻撃を続けるとホロウェイ（CNO: 海軍作戦部長）に言ったはずだ」と発言し、スコークロフトも「その通りです。大統領はシュレジンジャー国防長官にそう言いました」と証言した。（Mahoney, p. 187）他方、Lambによれば、ホロウェイ提督は第一波はマヤグエース号を取り戻すことを支援するための「武装偵察」だと述べている。（Lamb, p. 105）また、命令システムのどこかで大統領が命じた“hold off”が“cancel”になってしまったらしい。



ワシントン DC のベトナム戦争記念碑（筆者撮影）

撃ち込んだ。16時55分にはパトロール・ボート一隻を5インチ砲で撃沈している。

撤退のためには海兵隊の増派が必要となり、11時半に第二波（僅かに4機しか利用できず）のヘリコプターが送られた。海兵隊は増派されてきた兵員（約100名）から既に乗組員が解放されたことを知ったが、クメール・ルージュの攻撃が激しく、戦闘をやめることが出来なかった。AC-130 ガンシップが1万5000ポンドという通常爆弾の中では最大の爆弾を、島に投下してカンボジア側を圧迫した。

午後2時からヘリコプターによる撤収が始まり、海兵隊員は空母コーラル・シーに収容された。海兵隊の伝統に反して、8時頃に行方不明3名を残したまま撤兵した。この3名は捕虜となり、その後処刑された。この14時間の戦闘で死亡した15名の海兵隊員と行方不明の3名が、ワシントン DC のベトナム戦争記念碑に書き込まれた戦死者5万8183名の最後の兵隊であった。

5. 後始末と政策決定論からの視点

事前通告もなく勝手にウ・タパオ基地を米軍に利用されたタイ政府は、米軍使節団の高級メンバーを追放し、駐米大使を協議の名目で帰国させるなど明白な不満を示した。タイの新聞は政府に対して、タイと米国間の全ての条約と協定を公表し、米軍基地を閉鎖せよとの論陣を張っていた。

他方、米国では南ヴェトナム崩壊に失望していた国民の支持が集まり、ホワイトハウスにかかってきた電話は8対1で大統領を褒め称えた。また、Gallup社の世論調査によれば、大統領支持率は39%から50%へと11%も急上昇した¹²。ホワイトハウスを訪問中のオランダ首相（Johannes M. den Uyl）歓迎のパーティの席にいたフォード大統領、キッシンジャー補佐官らは、乗組員の解放を聞くと、タキシード姿で執務室に戻りスコークロフト補佐官代理、ラムズフェルド補佐官らと歓声をあげた。そのはしゃぎぶりはホワイトハウス付きのカメラマンであったデービッド・ケナリーが撮った写真が残っている。（次頁の写真）

しかし、タン島での戦闘で、米海兵隊は混乱に陥り予想外の損失を被むるなど、戦術的にみると問題が残った。特に、ワシントンと現場とのコミュニケーションが問題であった。コミュニケーションとは単に高性能の通信システムを完備すれば良いものではなく、戦略と戦術をどのように組み合わせるかが課題であった。一番肝心なマヤグエース号乗組員の所在に関する情報が不明であった。結果的には無用なタン島上陸と交戦が発生してしまった。更に、カンボジア本土への空爆も船と乗組員の奪還には全く無関係であった。この点はマスメディアからの非難を浴びた。

国際政治学の視点からすると、アリソンが開拓した政策決定論に対してこの事例が投げかけた問題がある。アリソンは1962年のキューバ・ミサイル危機を分析した画期的な業績のなかで、第2モデルの組織過程モデルと第3

¹² Gallup Opinion Index, Report No. 120, June 1975. 2月28日-3月23日から5月30日-6月2日の間にフォード大統領の人気は、支持率が39%から51%に上がり、不支持率は45%から33%へと低減した。



The presidential party upon hearing that the *Mayaguez* crew had been released, May 15, 1975. (New York Times front page photo taken in Oval Office)

(出典: Head et.al., op.cit. p. 139)

モデルの政府間政治（官僚政治）モデルを提示した。政策決定者が座る場がその人間が下す政策を決定するとした「定理」を示した。(Where a man stood from where he sat.)¹³ しかし、キッシンジャー国務長官は明白に、外交交渉よりも軍事行動を選択していた。明らかにこの事例では、ポジションよりもイデオロギーが政策を規定したように思われる。皮肉なことに歴代の国防長官は抑制の効いた政策を好んでいたことが知られている。

資 料

- Minutes, National Security Council Meeting, Monday, May 12, 1975, 12:05p.m.–12:50p.m. (Seizure of American Ship by Cambodian Authorities" (Top Secret) 15 pp. (NSC 議事録 # 1)
- Minutes, National Security Council Meeting, Tuesday May 13, 1975, 10:02a.m.–11:17a.m. (Seizure of American Ship by Cambodian Authorities" (Top Secret) 17 pp. (NSC 議事録 # 2)
- Minutes, National Security Council Meeting, Tuesday May 13, 1975, 10:40p.m.–12:25a.m. (Seizure of American Ship by Cambodian Authorities" (Top Secret) 23 pp. (NSC 議事録 # 3),
- Minutes, National Security Council Meeting, Wednesday, May 14, 1975, 15:52p.m.–17:42p.m. (Seizure of American Ship by Cambodian Authorities" (Top Secret)

¹³ Allison, G. T. *The Essence of Decision: Explaining the Cuban Missile Crisis*, pp. 195–196

- 27 pp. (NSC 議事録 # 4)、
 Minutes, National Security Council Meeting, Thursday, May 15, 1975, 16:02p.m.–
 16:20p.m. 29 pp. (NSC 議事録 # 5)、
 以上の NSC 議事録は、[http://www.ford.utexas.edu/library/document/nsmin/
 minlist.htm](http://www.ford.utexas.edu/library/document/nsmin/minlist.htm) よりダウンロードした。
 CINCPAC (Commander in Chief Pacific), *Command History 1975*, Appendix VI: The
 Mayaguez Incident, (Top Secret) 33 pp. Office of Joint Secretary.
 US Congress, House, Subcommittee on International Political and Military Affairs,
 Committee on International Relations, *Seizure of the Mayaguez*, Hearings on the
 Mayaguez Incident, pt. 4, *Report of the Comptroller General of the United States*,
 94th Cong., 2d sess., October 4, 1976,
 General Accounting Office, *The Seizure of the Mayaguez: A Case Study of Crisis Man-
 agement*, 1976, 70 pp.

参考文献

- Allison, Graham T. *The Essence of Decision: Explaining the Cuban Missile Crisis*, Little
 Brown, 1971.
 Allison, Graham T. and Morton H. Halperin, "Bureaucratic Politics: A Paradigm and
 Some Policy Implications." in *Theory and Policy in International Relations*, eds.
 Raymond Tanter and Richard Ullman, Princeton University Press, 1972, pp. 40–
 79,
 Burke, John P., *Honest Broker?: The National Security Advisor and the Presidential Deci-
 sion Making*, Texas A & M University Press, 2009.
 Cable, James. *Gunboat Diplomacy: Political Applications of Limited Naval Force*, Chatto
 & Windus, 1971.
 Des Brisay, Captain Thomas D., "Fourteen Hours at Koh Tang", 29 December 1979, In
 Major A. J. C. Lavalley, *The Vietnamese Air Force, 1951–53: An Analysis of Its Role in
 Combat and Fourteen Hours at Koh Tang*, United States Air Force Southeast Asia
 Monograph Series, Vol. III, Office of Air Force History, United States Air Force,
 Washington, D.C., 1985, pp. 82–161.
 Ford, Gerald R., *A Time to Heal: The Autobiography of Gerald Ford*, Harper & Row,
 1979. 邦訳『フォード回顧録—私がアメリカの分裂を救った』関西テレビ放送、
 1978 年。
 George, Alexander L., David K. Hall and William R. Simons. *The Limits of Coercive Di-
 plomacy Laos-Cuba-Vietnam*, Little Brown, 1971.
 Guilmartin, John F., JR., *A Very Short War: The Mayaguez and the Battle of Koh Tang*,
 Texas A & M University Press, 1995.
 Head, Richard et al. *Crisis Resolution: Presidential Decision Making in the Mayaguez
 and Korean Confrontations*, Westview Press, 1978.
 Kissinger, Henry. *White House Years*, Little Brown, 1979.
 Kissinger, Henry. *Years of Renewal*, Simon and Schuster, 1999.
 Lamb, Christopher. *Belief Systems and Decision Making in the Mayaguez Crisis*, Univer-
 sity of Florida Press, 1989.
 Mahoney, Robert J. *The Mayaguez Incident: Testing America's Resolve in the Post-Viet-*

- nam Era, Texas Tech University Press, 2011
- Neustadt, Richard E. And Ernest R. May, *Thinking in Time: The Uses of History for Decision Makers*, The Free Press, 1986, 白井久和他訳『ハーバード流歴史活用法』三嶺書院、1996年。
- Robinson, Major Kenneth L., "Mayaguez and National Security Decision Making in Crisis" United States in Marine Corps, Command and Staff College, Marine Corps Univeristy, 1997.
- Short, Philip, *Pol Pot: Anatomy of a Nightmare*, Henry Holt and Company, 2004,
宇佐美滋「危機管理と政策決定—マヤグエス号事件におけるフォード政権の危機処理について」『国際問題』1980年7月号、43-67頁
- Wetterhahn, Ralph, *The Last Battle: The Mayaguez Incident and the End of the Vietnam War*, A Plume Book, 2001.
- Wormuth D. and Edwin B. Firmage, *To Chain the Dog of War: The War Power of Congress in History and Law*, Southern Methodist University Press, 1986,
- 山田 寛『ポルポト「革命」史—虐殺と破壊の4年間』講談社選書メチエ、2004年。

キーワード

危機決定、米国の対外政策、フォード大統領、キッシンジャー、カンボジア